

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目ジャノメチョウ科

クロヒカゲモドキ

Lethe marginalis (Motschulsky, 1860)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



選定理由

本州、四国、九州に分布するが産地は局限されている。県内では浜田市周辺のみから知られていたが、衰亡が著しく絶滅が危惧されている。

概要

翅長30—34mm。同属のクロヒカゲに似るが眼状紋の大きさで識別できる。年1回7月下旬に出現。クヌギ、コナラなどの雑木林を生息域とし、昼間は林の中で静止しているが、曇った日や夕方に活発に活動する。クヌギ、タブの樹液を好み、訪花は観察されていない。多産地であった長野県や山梨県などでも開発で雑木林が荒れ、減少している。

参考文献

有田 齊・前田善広(2014) 珠玉の標本箱(8) . 84pp. NRC出版。
石本信博・佐々木保(1979) 浜田市で採集したギンイチモンジセリとクロヒカゲモドキ。すかしば。(12): 30。

県内での生息地域・生息環境

県内の生息が唯一確認されている浜田市三階山周辺の雑木林は、高速道路や県立大学などの大規模開発が進み、生息域が極端に減少している。わずかに残されたクヌギ林の保全が必要であり、このままクヌギ林の伐採が進めば本県から姿を消す恐れがきわめて高い。

存続を脅かす原因

大規模な開発によるクヌギを主とした雑木林の消失。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目アオイトトンボ科

オツネトンボ

Sympecma paedisca (Brauer, 1877)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):北山拓

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

県内の分布が局限される。また過去に発見された産地のほとんどが絶滅状態である。

概要

全長35—41mm。全身淡褐色をした地味な色調のイトトンボ。未熟なホソミオツネトンボとよく似るが、閉じた翅の縁紋が重ならないことで区別できる。初夏に羽化した個体はそのまま林縁などで生活し、越冬を終えた翌春、生殖活動を行う。和名「オツネン(越年)」は、成虫で越冬することに由来する。ユーラシア大陸の北寄りにも広く分布し、国内では北海道、本州、四国、九州北部に分布するが、西日本ではまれとなる。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治(2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22: 1-116。
大浜祥治(1987) 島根県のトンボ10種の新産地。すかしば, 28: 17-18。
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫(2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6: 215-290。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を除き沿岸部から内陸部まで広く分布するが産地は局限される。生息地はいずれも日当たりのよい植生豊かなため池である。なお県内で越冬の様子は観察されていない。

存続を脅かす原因

池の水質悪化や産卵基質となる抽水植物の除去。成虫の生活場所となる林の消失。

(執筆: 大浜 祥治)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目モノサシトンボ科

グンバイトンボ

Platycnemis foliacea sasakii Asahina, 1949

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

小規模で清澄な緩流に生息し、県内の産地はおもに江の川・高津川水系に数カ所程度。

概要

全長37-41mm。オスの中・後肢の一部は顕著な偏平形で白い米粒のように見える。メスでは、しばしば同所的に生息するモノサシトンボと似ており、識別には注意が必要。平野部から低山地、水生植物の繁茂する緩やかな清流が代表的な生息環境。中国北部に原名亜種が分布し、国内では関東以西に分布する。特殊な生息環境のためか産地は全国的に局限され特に関東地方では近年急速に生息地が失われている。

参考文献

福井修二 (2007) 飯南町でグンバイトンボが採集される。すかしば, 55:50.
三島秀夫 (1991) キイロサナエとグンバイトンボの記録。すかしば, 35:5.
大浜祥治 (1986) 匹見・益田周辺におけるトンボの記録。すかしば, 26:1-4.
戸田顕史・小西 努 (1998) 邑智町におけるトンボ数種類の採集記録。すかしば, 46:69.
山本正志 (2006) 島根県瑞穂町久喜にてグンバイトンボを採集。すかしば, 54:50-51.

県内での生息地域・生息環境

今まで分布が江の川水系と高津川水系に限られていたが、神戸川中流域からも発見された。小規模な緩流のほか、常にきれいな水の流入が認められるため池や砂防ダムの堆砂池等、止水的環境での生息も確認されている。

存続を脅かす原因

造成等開発による生息地の埋め立て。湧水等の流入経路の分断。成虫の休息及び摂食場所となる雑木林の伐採。

(執筆: 大浜 祥治)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目イトトンボ科

ベニイトトンボ

Ceriagrion nipponicum Asahina, 1967

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

2007年に県内で初記録されたが、産地は益田市周辺や県中部地域などの数カ所に限定される。

概要

全長35-42mm。オスは腹部を中心に全身が鮮やかな朱色でメスでは幾分淡色となる。モートンイトトンボ、アジアイトトンボ、アオモンイトトンボのメスも未熟時には朱色であるが、本種と異なり成熟に伴い緑色あるいは褐色に変わる。また最近県内で確認された近縁のリュウキュウベニイトトンボとは酷似するが、オスの複眼が緑色ではなく本種では赤くなることなどで区別できる。平野部から低山地にかけての、植生豊かな池沼が代表的な生息環境で、5月~10月上旬まで成虫が確認されている。国内では宮城県以南に分布するが産地はかなり局地的である。

参考文献

林 成多・大浜祥治 (2022) ベニイトトンボを島根県雲南市で確認。すかしば, 69: 68.
北山 拓・大浜祥治 (2019) リュウキュウベニイトトンボを島根県から初記録。すかしば, 66: 31.
皆木宏明 (2008) 島根県中部で確認されたベニイトトンボ (トンボ目:イトトンボ科)。島根県立三瓶自然館研究報告, 6:33-34.
宮本詔子・宮本聡史 (2008) 益田市でベニイトトンボを採集する。すかしば, 56:45-47.
宮本詔子・宮本聡史 (2010) 益田市におけるベニイトトンボの分布調査。すかしば, 58:27-29.

県内での生息地域・生息環境

分布は県中部・西部の数カ所に限られていたが、最近になって県東部の雲南市で発見された。益田市周辺では7カ所の農業用ため池などで確認されていたが、多産した初記録地の益田市飯田町のため池では改修により既に生息が途絶えており、良好な生息地の保全が急務である。

存続を脅かす原因

土地造成など開発による生息する池沼の埋め立てや水質悪化など。
(執筆: 大浜 祥治)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目イトトンボ科

モートンイトトンボ

Mortonagrion selenion (Ris, 1916)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

分布は幾分限られるものの、かつては県内で産地が散見されたが、近年そのほとんどが消失。全国的にも西日本で減少傾向が著しく、絶滅したとされる県も少なくない。

概要

全長22-32mmの小型のイトトンボ。オスは腹端部の鮮やかな橙色が目立ち、また眼後紋が三日月状で、一見して他種と区別できる。未熟なメスは全身鮮やかな橙色であるが、成熟するにつれて黄緑色に変わり、腹部背面に黒条が現れる。5月中旬から6月下旬ごろが最盛期。交尾は早朝に行われ、メスが植物組織内に単独で産卵する。朝鮮半島から沿海州にかけて分布し、国内では北海道南端から九州南端まで分布。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (22), 1-116.
皆木宏明・三島秀夫 (2016) 浜田市で確認されたモートンイトトンボ(トンボ目イトトンボ科)について。島根県立三瓶自然館研究報告,(14):71-72.
大浜祥治 (2015) 大田市・美郷町でモートンイトトンボを確認。すかしば,62:36.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告,6:215-290.
佐々木岳 (2022) 松江市八雲町でモートンイトトンボを採集。すかしば,69:76.

県内での生息地域・生息環境

平地から低山地にかけての湿地や休耕田等に分布するが、生息地が乾燥化、草原化する例が多く安定した産地はごくわずか。隠岐諸島では未記録。

存続を脅かす原因

造成など開発による生息地の消失や湿地の乾燥化、草原化。水田への農薬散布。

(執筆者:大浜 祥治)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目ヤンマ科

ネアカヨシヤンマ

Brachytron anisopterum (Selys, 1883)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

沿岸平野部の林縁に形成された湿地的環境に生息するが、分布が非常に限られるうえ、既知産地の消失が顕著。

概要

全長75-88mmの大型ヤンマで、黒みの強いずん胴な体形が特徴的。幼虫は日本産ヤンマ科で唯一背棘を有し、識別が容易。同属のアオヤンマが、ため池やクリークなど水深の比較的深い開放的な水域を好むのに対し、本種は水田や湿地等水深がほとんどなく、一方を雑木林等に接するような半開放的環境を好む。初夏に羽化し未熟な個体は日中に林縁部をゆったりと摂食飛翔する。成熟すると黄昏活動性が強くなる。産卵は日中に、湿地の湿土や朽木に行う。国内では本州、四国、九州に分布。近年、温暖化による分布域の北上が報告されている。

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
大浜祥治 (1991) 美保関町でネアカヨシヤンマを採集。すかしば,36:4.
大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば,50:1-36.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告,6:215-290.
高橋淳志 (2000) 多伎町でネアカヨシヤンマ・アオヤンマの多産地を発見。すかしば,48:42-43.

県内での生息地域・生息環境

県全域に広く分布するが、生息地はいずれも沿岸部で内陸部からの記録はない。隠岐諸島では4島すべてに記録がある。

存続を脅かす原因

造成、残土処理などによる湿地や放棄田の埋め立て。圃場整備による水田の乾燥化。

(執筆者:大浜 祥治)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目エゾトンボ科

ハネビロエゾトンボ

Somatochlora clavata Oguma, 1913

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 坂田國嗣

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

県内における過去の記録は、隠岐諸島の数カ所と本土側の3カ所だけであり、隠岐の島町男池で2015年8月28日に採集された1オスを最後に本県での記録が途絶えている。全国的にも減少傾向が著しく、新たに産地が発見された場合は、その保全が急務である。

概要

全長58-66mm。全身金属光沢がありエゾトンボに酷似するが、オスは尾部上付属器、メスは産卵弁が長く突き出ることによって区別できる。未熟な成虫は林間の開けた空間で摂食飛行を行い、成熟すると水域に戻って一定の区間ホバリングを交えて縄張りを張る。産卵は岸近くの水面やコケ、礫の隙間に行く。夕方には谷筋などをヤンマと混じって黄昏摂食飛行も行う。日本特産種。

参考文献

福岡一雅 (1996) ハネビロエゾトンボ採集の報告。すかしば,43/44:51。
三島秀夫 (1986) ハネビロエゾトンボを大田市で採集。すかしば,26:15。
長瀬 翔 (2012) 島根半島部でハネビロエゾトンボを採集。すかしば,59:29。
大浜祥治 (1986) 匹見・益田周辺におけるトンボの記録。すかしば,26:1-4。
大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば,50:1-36。

県内での生息地域・生息環境

記録の少ない県東西部に比べ、隠岐諸島では島前・島後ともに多くの記録がある。本種の好む環境は林縁に接した緩やかな流れや湿地内を流れる細流である。

存続を脅かす原因

幼虫の生息場所となる小規模な水路のコンクリート化や水域の乾燥化。成虫の休息場所となる林の消失。

(執筆者: 大浜 祥治)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目ヤマトンボ科

キイロヤマトンボ

Macromia daimoji Okumura, 1949

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 北山拓

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

周辺に樹林があり河床が砂質系の河川中下流域に生息するため産地が局地的である。

概要

全長75-83mm。同属のコヤマトンボに似るが、成虫は腹部第3節側面の黄条が上下で分断されること、幼虫は下唇の形状や爪の長さで区別できる。未熟個体は河畔林などの開けた空間で摂食飛行を行い、成熟すると水域に戻ってくる。オスは早朝と夕方を中心に河川の広範囲を往復飛行する。産卵は薄暗くなるころから始まり、流れの緩やかな砂地の場所を不規則に飛行しながら間欠的に打水を行う。国内では本州(北限は岩手県)、四国、九州に分布するが、産地は局地的で減少している地域も少なくない。

参考文献

樋野耕一 (2022) 安来市佐久保湿地でアオヤンマとキイロヤマトンボを採集。すかしば, (69): 69。
小坂一章 (2009) 江の川中流域に居すキイロヤマトンボ。山口のおし, (8): 79-91。
小坂一章 (2010) 中国太郎下流域に散居するキイロヤマトンボ。山口のおし, (9): 117-126。
小坂一章 (2010) 石州高津川にキイロヤマトンボあり。山口のおし, (9): 127-134。
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅵ。ホシザキグリーン財団研究報告, (6): 215-290。

県内での生息地域・生息環境

県内では神戸川を含む斐伊川水系の中下流に広く分布しているが、静岡川や江の川・高津川両水系など、県内全域に記録がある。隠岐諸島では未記録。

存続を脅かす原因

河川改修等による河床の変化。未熟期間を過ごす河川周辺の林の消失。
(執筆者: 樋野 耕一)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カメムシ目コオイムシ科

コオイムシ

Appasus japonicus Vuillefroy, 1864

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

県内では隠岐(島後)を含む各地で局所的に生息が確認されているのみであり、生息環境の悪化による絶滅が危惧される。

概要

体長17-20mm前後。平野部の池や河川敷、水田、休耕田、湿地などの浅い止水域に生息している。成虫のオスが背中に卵を背負う習性がある。近縁種にオオコオイムシがいるが、島根県産の本種はより小型で体色が薄く、前胸背板がより狭まるなどの特徴により、区別可能である。しかし、正確な同定にはオス交尾器の検討が必要である。国外ではシベリア、朝鮮半島、中国に分布し、国内では本州、四国、九州に分布する。

参考文献

川野敬介(2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告。(8):77-97。
川野敬介・尾原和夫・大木克行・吉岡誠人・青木新吾・林 成多・皆木宏明(2011) 島根県産水生半翅類の分布域録。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(2):1-104。

県内での生息地域・生息環境

県内では平野部を中心に生息しているが、まれに山間部にも生息地がある。特に、中海周辺に生息地が多い。隠岐の島後では2005年に確認されたのが最後で、その後の記録が20年間に渡り途絶えている。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移。ウシガエルなどの外来種による捕食。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カメムシ目サシガメ科

ゴミアシナガサシガメ

Miophanes tipulina Reuter, 1881

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):大松勇司

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

細長い大型のサシガメで、全国的に生息地が局限され絶滅状態にある。県内では1970年代以降記録が途絶えていたが、近年新たな生息地が見つかった。

概要

体長17mm内外、淡褐色の地に濃淡の斑紋があり、長毛でおおわれる。脚、触角は細長く糸状で体長と同じかそれよりも長く、静止しているとガガンボのように見える。里山環境で林縁部の古民家内外で発見されることが多い。国内では本州・四国・九州、国外では朝鮮半島・中国に分布する。

参考文献

近木英哉(1978) 昆虫類。「島根の生物」:71-79。日本生物教育会松江大会実行委員会。
大松勇司・錦織龍生・國生竜之介・林 成多(2024) 島根県東部におけるゴミアシナガサシガメの記録。すかしば。(71):28-29。

県内での生息地域・生息環境

古くは三瓶山麓の島根大学農場の宿舎内で採集されていたが、2023年12月雲南市大東町の山間部で古民家の納屋から本種の10頭程度の個体群が発見された。この納屋内には多くのオオヒメグモが生息しており、本種はこれをおもな餌資源として利用していると推察されている。

存続を脅かす原因

本種は家屋を含む里山環境に適応した種であり、山里の崩壊とともに姿を消すとみられる。山里の放置や住居の無人化、住環境の近代化など。周辺の二次林の竹林化。

(執筆: 尾原 和夫)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カメムシ目セミ科

コエゾゼミ

Auritibicen bihamatus (Motschulsky, 1861)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

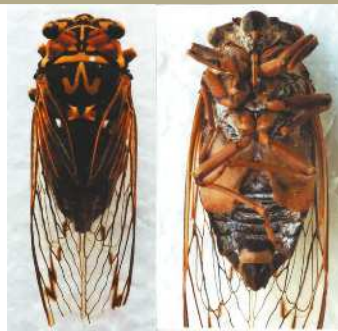
島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):金平修一



選定理由

西中国山地が本州における本種分布の西限となる。この地域では標高1,000m以上のブナ林に局限され、個体数も少ない。

概要

体長は31-37mmでオスがやや大きく、翅端までは47-56mmである。エゾゼミより小型で、前胸背後縁の黄褐色帯が外方の黒紋で切断される。色彩や斑紋には変異が多い。北海道・本州・四国、国外ではサハリン・千島に分布する北方系のセミであり、7-8月にブナ林に出現する。鳴き声はエゾゼミに似るがやや低く、細い。

参考文献

近木英哉 (1978) 昆虫類, 「島根の生物」:71-79, 日本生物教育会松江大会実行委員会。
尾原和夫 (2003) 2003年大万木山城におけるエゾゼミ類の記録, すかしば, (51):29。
税所康正 (2004) 大万木山のエゾゼミ類, CICADA, 18(1):9-10。
尾原和夫 (2012) 島根県のセミ類, 近年の生息情報, すかしば, (59): 34-35。
林 成多・野崎達也・片岡大輔・大野桂一 (2020) 大万木山におけるカメムシ類調査 (2018・2019年), ホシザキグリーン財団研究報告, (24):43-59。

県内での生息地域・生息環境

東部山地の標高1,000m以上の地点4カ所で記録されている。成虫は昼間はブナの梢上部で鳴いている。西部山地(旧・匹見町)において本種として記録されているのは県境を越えた広島県や山口県側で生息が確認されている同属のキュウシュウエゾゼミの可能性がある。

存続を脅かす原因

地球温暖化によるブナ林の遷移。ブナ林の伐採や道路建設などによる分断、乾燥化。

(執筆: 尾原 和夫)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カメムシ目キジラミ科

サイカチマダラキジラミ

Euphalerus robinae (Shinji, 1938)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

寄主植物のサイカチの生育地が県内では1カ所に限定されているため、本種の生息地も限定されている。

概要

体長2.0mm前後。胸部は全体に黒い。前翅には特徴的な黒い斑紋があり、翅脈上に黒い斑点がある。額錐は短く、触角は短い。ジャケツイバラキジラミに似ているが、小さく、前翅の斑紋が異なる。サイカチ(マメ科)を寄主とし、幼虫は葉の縁を曲げた虫えい(虫こぶ)を形成する。新成虫は7月に出現する。

参考文献

林 成多・宮武頼夫・門脇久志 (2011) 島根県のキジラミ相, ホシザキグリーン財団研究報告, (14): 213-250。

県内での生息地域・生息環境

本種は寄主特異性が高いキジラミで、幼虫が成育できる寄主植物はサイカチのみである。県内の生息地は県中部のサイカチの生育地に限定されている。

存続を脅かす原因

サイカチ生育地の縮小や消滅。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目オサムシ科

カワラゴミムシ

Omophron aequale Morawitz, 1863

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 森山正治



選定理由

砂地に生息する地表性甲虫で、全国的に減少している。県内では1995年の記録があるが、現在では生息地がほとんど消失している可能性がある。

概要

体長5.5—6.5mm。ハンミョウ科やオサムシ科に近縁な独立した科として扱われる場合と、オサムシ科の亜科として扱われる場合がある。体は円形で脚が長い。海岸や砂丘、内陸の砂地（自然堤防など）に生息する。成虫は灯火に飛来する。国内では北海道、本州、四国、九州、国外では朝鮮半島、沿海州、中国に分布する。

参考文献

林 成多 (2020) ホシザキ野生生物研究所の島根県産ゴミムシ類標本について。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (26): 45-50.

県内での生息地域・生息環境

1964年に雲南市大東町、1995年に高津川で記録されている。近年の記録はまったくない。

存続を脅かす原因

砂地環境の消失。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目オサムシ科

ハマベゴミムシ

Pogonus japonicus Putzeys, 1875

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者): 島田孝



選定理由

塩性湿地に生息する種であり、本種の生息できる環境が県内ではきわめて限定されている。日本海側での分布という点においても注目される。全国的な希少種でもある。

概要

体長6.5mm前後。背面はつやのある黒色だが、上翅の側方から翅端付近は茶褐色をしている。上翅の条溝は明瞭である。塩田跡や海岸の埋め立て地などに形成した潮性湿地に生息する。夜行性で灯火に飛来する。同属のドウイロハマベゴミムシは同じような環境に生息する種であるが、県内では確認されていない。日本固有種で本州、四国に分布する。中国地方では岡山県と山口県で記録され、それぞれの県のレッドデータブックに掲載されている。

参考文献

林 成多 (2013) 島根県の海岸性甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (9): 1-98.
島田 孝 (2006) 隠岐島後の重瀬川河口の地表性甲虫 (1) ハマベゴミムシ。ホシザキグリーン財団研究報告, (9): 126.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島の干拓地の牧場に生息している。同じ場所で塩性湿地に生息するオオツノハネカクシが確認されている。島根県内で同様な環境はほとんどなく、生息地が限定されている。本土側でも中海の埋め立て地や沿岸部の河口周辺などで、灯火による調査を行えば、生息を確認できる可能性はある。

存続を脅かす原因

塩性湿地の開発、生息地の塩分条件の変化。現状としては生息地の湿地は放牧地として管理され、状況は安定している。希少種が生息する塩性湿地としての価値が認められれば、本種の保全に繋がることが期待される。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

ケシゲンゴロウ

Hyphydrus japonicus Sharp, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

かつて県内では隠岐諸島も含めて全県域で記録があった。しかし、2010年以降、急速に減少しており、絶滅が危惧される状況になっている。

概要

体長4-5mm前後。成虫の体は円形で厚みがある。頭部と前胸は赤褐色で、黒斑がある。上翅は橙色で黒斑がある。幼虫は頭部に長い突起があり、カイミジンコ類を捕食する。ため池や水田、休耕田など、植生があり、やや富栄養な止水域に生息する。

参考文献

林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
 林 成多 (2020) ケシゲンゴロウ幼虫の飼育観察。ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 51-59.
 Hayashi, M. and S. Ohba (2018) Mouth morphology of the diving beetle *Hyphydrus japonicus* (Dytiscidae: Hydroporinae) is specialized for predation on seed shrimps. *Biological Journal of the Linnean Society*, 125: 315-320.
 川野敬介 (2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (8) :77-97.

県内での生息地域・生息環境

本種は隠岐諸島や本土側に広く分布していたが、2010年頃を境に急速に減少し、局地的な分布を示すようになった。ため池や休耕田などでまれにみられる。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、移入生物(外来魚など)の侵入・繁殖。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

ヒメケシゲンゴロウ

Hyphydrus laeviventris laeviventris Sharp, 1882

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

もともと個体数が少ない種であるうえに、水田・池沼の減少と護岸工事などの開発行為などにより生息地が一段と局所化し、種の絶滅が危ぶまれている。

概要

体長4.3~5.0mm、体型は短卵形を呈する。背面は暗黄赤褐色で光沢を帯び、全体的に暗色部が発達するため黒みがかった外観を示す。触角・口器・肢は黄赤褐色である。前胸背板前縁が黒色に縁取られる点が重要な識別形質であり、この特徴により同属のケシゲンゴロウと明確に区別される。日本固有種として本州・四国・九州に分布する。平野部から丘陵部にかけての池沼・放棄水田・湿地といった止水域を生息環境とし、水生植物の繁茂した浅く薄暗い水域を選好する。成虫は5~11月に出現が記録され、幼虫は芋虫状で、比較的水深のある場所でも生活する。また、成虫態で越冬することが知られている。

全国的に産地は局所的で個体群規模も小さく、環境省レッドリスト(2020)において絶滅危惧Ⅱ類(VU)に選定されており、複数の都道

参考文献

川野敬介・中野浩史・林 成多・山内健生 (2006) 出雲市平田地域のため池生物調査 (2) 止水性水生昆虫類の生息状況。ホシザキグリーン財団研究報告, 9: 13-37.
 森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版 図説日本のゲンゴロウ, 118pp. 文一総合出版
 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) ネイチャーガイド日本の水生昆虫, 352pp. 文一総合出版

府県で絶滅危惧種に指定されている。また、本種は比較的水温の低い環境を好む傾向があるため、近年の気候の温暖化に伴う水温上昇も本種の減少に拍車をかけていると思われる。

県内での生息地域・生息環境

県内ではもともと生息地が限られており、報告数も多くない。また、生息地での個体数も多くない。近年、大規模開発事業の推進により本種の生息適地が連続的に消失し、残存個体群の孤立が顕著である。種の存続には、水辺環境のモザイク構造の維持、化学物質負荷の低減、侵略的外来種の排除など、生息可能環境の回復と拡大が急務となっている。

存続を脅かす原因

池沼・湿地の埋立や開墾。ため池管理の放棄に伴う植生遷移の進行。護岸工事による水辺環境の均質化。圃場整備事業に伴う水田構造の改変。農業類の流入による水質劣化。外来魚類の侵入による幼虫・成虫への捕食圧増大。

(執筆: 小早川 誠)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

ツブゲンゴロウ

Laccophilus difficilis Sharp, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

かつて県内では隠岐諸島も含めて全県域で記録があった。しかし、2010年以降、急速に減少しており、絶滅が危惧される状況になっている。

概要

体長4-5mm前後。成虫の体は楕円形。頭部と前胸は淡緑色。上翅は淡緑色で不規則な黒色縦条がある。幼虫は緑色。ため池や水田、休耕田など、植生があり、やや富栄養な止水域に多く生息するが、貧栄養な水域にも生息する。日本、朝鮮半島、ロシア極東、中国に分布する。

参考文献

林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
川野敏介 (2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (8): 77-97.
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

本種は隠岐諸島や本土側に広く分布していたが、2010年頃を境に急速に減少し、局地的な分布を示すようになった。ため池や休耕田などでまれにみられる。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、移入生物（外来魚など）の侵入・繁殖。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

キベリマメゲンゴロウ

Platambus fimbriatus Sharp, 1884

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
-	-	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):小早川誠

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

生息地での河川改修と水質悪化による影響を受けやすく、全国的に個体数が減少傾向にある。気候の温暖化に伴い、特に西日本では絶滅が危惧される。

概要

体長6.5-8.0mm程度。体形は長楕円形。前胸背側に黄色帯を持ち、上翅基部から側部にかけて黄色帯を持つ点で近縁種のモンキマメゲンゴロウと識別される。国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国に分布する。河川の中流域から下流域の流れの緩やかな場所や淀み、石の下などに生息する。また、幼虫も流水域に生息し、肉食性を示す。晩秋の低水温期に産卵・孵化し、冬から早春にかけて幼虫が成長する特異な生活史を持つ。本種は河川の中流域から下流域に生息する種であることから、河川改修や水質汚染による影響を受けやすく、

参考文献

小早川誠 (2023) 美郷町でキベリマメゲンゴロウを確認。すかしば, 70: 42.
森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版 図説日本のゲンゴロウ, 118pp. 文一総合出版
Ryohei Okada, Yves Alarie, Mariano C. Michat (2019) Description of the larvae of four Japanese Platambus Thomson, 1859 (Coleoptera: Dytiscidae: Agabinae) with phylogenetic considerations. Ootaxa, 4646 (3): 401-433.
山田 学 (2003) 島根県西部地域における大型水生昆虫の採集記録。すかしば, 51: 39-48.

生息地が減少している。また、冬季に繁殖活動を行うことから、気候の温暖化による個体数の減少も懸念されている。特に西日本では多くの府県で絶滅危惧種の上位カテゴリーに分類されている。環境省レッドリスト(2020)では準絶滅危惧(NT)、複数の都道府県で絶滅危惧種に指定されている。

県内での生息地域・生息環境

県内の平野部を中心に生息が確認されているが、分布に偏りがみられる。また、県内での報告数も多くない。本種の保全には、流水域の淀みと良好な水質の維持、護岸改修時の生息環境への配慮が必要である。

存続を脅かす原因

河川改修による護岸工事等の開発行為と、生活排水流入による水質悪化。気候の温暖化。

(執筆: 小早川 誠)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

コガタノゲンゴロウ

Cybister tripunctatus lateralis (Fabricius, 1798)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



■ 選定理由

かつて県内では隠岐諸島や三瓶山、県東部など限られた場所で記録があった。しかし、2000年以降、本土側では全体的に確認例が増えてきており、今後の動向を注視する必要がある。

■ 概要

体長24-29mm前後。大型種のゲンゴロウと同様、前胸背板・上翅に黄色の縁取りがあり、腹面は全体に黒色。水生植物の多いため池や水路、水田などの止水域をおもな生息地としている。本亜種は東アジアから欧州まで分布する。国内では、本州、四国、九州、南西諸島、小笠原に分布する。本州では1950-1990年代に一度絶滅したとされる地域もある。2000年以降、西日本では確認例が相次いで報告されており、状況が変化してきている。とりわけ日本海側での増加状況は顕著で、石川県においても多数の成虫の確認や幼虫の繁殖が報告されている。

● 参考文献

林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84。
小早川誠・永田正人 (2006) 島根県内にてコガタノゲンゴロウを採集。すかしば, (54): 30-31。
Watanabe, K., T. Sumikawa, H. Fukutomi, Y. Nishijima and M. Hironaka (2023) Current status of the northern population of the diving beetle *Cybister tripunctatus lateralis* (Coleoptera, Dytiscidae) in Ishikawa Prefecture, Japan. *Elytra*, New Series, 13 (2): 195-202.

■ 県内での生息地域・生息環境

本種はもともと県内では少なかったらしく、1990年代以前の記録はわずかである。しかし、2000年以降、県東部や隠岐諸島などで散発的な記録が報告されるようになり、繁殖も確認されている。近年では沿岸部を中心に、秋に多数の個体が出現するようになった。2024年には県内で幼虫も確認されており、以前より県内で繁殖していたことは確実である。

■ 存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、移入生物(外来魚など)の侵入・繁殖。

(執筆: 林 成多)

昆虫類

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ミズスマシ科

ヒメミズスマシ

Gyrinus gestroi Regimbart, 1883

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



■ 選定理由

県内の生息地は局地的である。全国的にも減少している。

■ 概要

体長4.6-5.2mm。成虫の体は幅が狭く、後方に向かって急に狭まる。背面は全体に黒色で強い金属光沢がある。ため池などの水面を旋回しながら遊泳する。本州、四国、九州、朝鮮半島に分布する。

● 参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117。
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84。
川野敬介 (2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (8): 77-97。
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

■ 県内での生息地域・生息環境

県東部や西部のため池に生息しているがまれである。近年も確認例はあるが、きわめて少ない。

■ 存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移。

(執筆: 林 成多)

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ミズスマシ科

コミズスマシ

Gyrinus curtus Motschulsky, 1866

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

県内の生息地は局地的である。全国的にも減少している。

概要

体長4.9-5.6mm前後。成虫の体は幅が広く、後方に向かって緩やかに狭まる。背面は全体に黒色で強い金属光沢がある。ため池などの水面を旋回しながら遊泳する。国内では北海道、本州、四国、九州、国外では千島、サハリンに分布する。

参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。

県内での生息地域・生息環境

県東部や西部のため池に生息しているがまれである。近年の確認例がほとんど無い状況である。

存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ミズスマシ科

オオミズスマシ

Dineutus orientalis (Modeer, 1780)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

かつて県内では隠岐諸島も含めて全県域で記録があった。しかし、2010年以降、急速に減少しており、絶滅が危惧される状況になっている。

概要

体長7-12mm前後。成虫の体は楕円形で翅端にトゲがある。背面は黒色で金属光沢が強く、黄色の縁取りがある。ヒシなどの浮葉植物が生えるため池に生息する。成虫は水面を旋回しながら遊泳し、浮葉など水面近くの植物体の表面に産卵する。幼虫は腹部に器官鰓があり、遊泳をする。成虫は水面に落下した昆虫などを捕食し、幼虫は水中で水生昆虫などを捕食する。

参考文献

林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.
川野敏介 (2005) 島根県東部の止水性水生昆虫の分布記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (8) :77-97.
Sugiura, S. and M. Hayashi (2024) Defenses of whirligig beetles against native and invasive frogs. PeerJ, 12:e17214

県内での生息地域・生息環境

本種は隠岐諸島や本土側に広く分布していたが、2010年頃を境に急速に減少し、局地的な分布を示すようになった。ため池でまれにみられる。

存続を脅かす原因

生息地の界面活性剤等による水質汚濁、池沼の開発改修、移入生物(外来魚など)の侵入・繁殖。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ハネカクシ科

オキチビハネカクシ

Micropeplus okiensis Watanabe, 1990

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

—

No Image

選定理由

隠岐(知夫里島)で発見され記載されたハネカクシの微小種で、その後、鳥取市で採集されたが、分布が限定されている。

概要

別名オキセスジチビハネカクシ。体長1.6–2.0mm前後の微小種。全体が黄褐色から褐色で光沢がない。チビセスジハネカクシ属は、ハネカクシ科の中でも微小・扁平な特異な体型のグループで、国内では8種がいる。本種は、1983年に隠岐(知夫里島)で初めて採集され、既知の6種とは頭部、上翅、腹部の構造やオスの交尾器の形態が大きく異なることから新種記載された。本種は、1991年に鳥取市でも採集されており、県内の本土側で発見される可能性がある。

参考文献

柴田泰利・丸山宗利・保科英人・岸本年郎・直海俊一郎・野村周平・Volker Puthz・島田 孝・渡辺泰明・山本周平(2013)日本産ハネカクシ科総目録(昆虫綱:甲虫目)。九州大学総合研究博物館研究報告。(11): 69-218。
Watanabe, Y. (1990) A new *Micropeplus* (Coleoptera, Staphylinidae) from the Islands of Oki, West Japan. Proc. Japan. Soc. Syst. Zool., (42): 37-41.

県内での生息地域・生息環境

本種は、県内では 知夫里島が唯一の既知産地である。林床下の腐葉土層に生息する微小種であるため発見し難く、特殊な採集法による調査が必要である。隠岐諸島でも知夫里島以外では発見されていないが、県内の社寺林など生息の可能性がある場所での調査が必要である。

存続を脅かす原因

生態等が明らかでなく不明であるが、自然度の高い森林、社寺林などの消失。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ハネカクシ科

オオツノハネカクシ

Bledius salsus Miyatake, 1963

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

情報不足(DD)

撮影者(提供者): 公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

塩性湿地に生息する種であり、本種の生息できる環境が県内ではきわめて限定されている。日本海側での分布という点においても注目される。

概要

体長6.2–7.3mm。雄の頭部に2本の突起があるほか、前胸背板に1本の長い角状突起がある。雌にはこの突起がない。塩田跡や海岸の埋め立て地などに形成した潮性湿地に生息する。夜行性で灯火に飛来する。塩田に無数の穴を掘ることから、かつては害虫とされていた。日本固有種で本州、四国に分布する。中国地方では岡山県と山口県で記録され、それぞれの県のレッドデータブックに掲載されている。

参考文献

林 成多(2013) 島根県の海岸性甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(9): 1-98。
島田 孝(2006) 隠岐島後の重瀬川河口の地表面性甲虫(2) オオツノハネカクシ。ホシザキグリーン財団研究報告。(9): 144。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島の干拓地の牧場に生息している。同じ場所で塩性湿地に生息するハマベゴムシが確認されている。島根県内で同様な環境はほとんど無く、生息地が限定されている。本土側でも中海の埋め立て地や沿岸部の河口周辺などで、灯火による調査を行えば、生息を確認できる可能性はある。

存続を脅かす原因

塩性湿地の開発、生息地の塩分条件の変化。現状としては生息地の湿地は放牧地として管理され、状況は安定している。希少種が生息する塩性湿地としての価値が認められれば、本種の保全に繋がることが期待される。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ヒメドロムシ科

ヒョウタンヒメドロムシ

Podonychus gyobu Yoshitomi & Hayashi, 2020

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 森本涼介

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

分布がきわめて局地的で、生息環境が開発や大雨の影響を受けやすいため。

概要

体長1.2–1.4mm。成虫は前胸と上翅基部の境界が顕著に狭まる瓢箪型の体型であり、褐色の背面に光沢を有する。河川の流水中に露出したダンチクやツルヨシの根の間隙に生息する。本種は2020年に大分県で採集された個体から記載された。*Podonychus*属はこれまでにインドネシアのシベルト島に分布する*P. sagittarius*のみが知られ、隔離分布することから生物地理学的に興味深い種である。詳しい生態は不明。国内では本州、九州に分布する。

参考文献

林 成多 (2020) 改訂 島根県の水生甲虫 (2). ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (28): 1-76.
石山侑樹・林 成多・森本涼介 (2020) ヒョウタンヒメドロムシ (コウチュウ目, ヒメドロムシ科) の本州本土からの新分布記録. 昆虫 (ニューシリーズ), 23 (3): 97-98.
森本涼介・外山祐紀 (2022) 島根県におけるヒョウタンヒメドロムシの追加記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (25): 116.

県内での生息地域・生息環境

県東部および西部の河川下流域から中流域にかけて局所的に分布し、砂質や砂礫質の河岸に生えるダンチクやツルヨシの根の間隙から確認されている。

存続を脅かす原因

本種の既知産地に限られることに加え、生息する河川中・下流域は不安定な環境であるため、人為開発や大雨の影響により急速な生息地の減少・消失が懸念される。

(執筆者: 森本 涼介)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ツチハンミョウ科

クロゲンセイ

Stenoria oohatai Morimoto et Maeta 2009

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 皆木宏明

島根県固有評価

島根県固有種

環境省カテゴリー

—



選定理由

2009年に新種として記載された後も、既知の分布は島根県の一部に限られており、生息密度も低い。

概要

体長8–11mm。体色は全身暗褐色。オス、メスともに翅があり、飛ぶことができる。成虫は飼育下では6~7月に出現する。本種は、地中に営巣するエサキムカシハナバチに労働寄生することが知られ、エサキムカシハナバチの巣内からクロゲンセイの擬蛹が得られている。本種は島根県で発見された個体をもとに2009年に新種記載された。これまでのところ島根県内の一部でしか生息が確認されておらず、確認例も少ない。

参考文献

Oohata.J., Minagi.K and Maeta.Y (2010) Some Bionomical Notes on Newly Discovered Blister Beetle,*Stenoria oohatai* Morimoto et Maeta from Japan (Coleoptera,Meloidae,Nimognathinae). Bulletin of the Shimane Nature Museum of Mt.Sanbe.No.8: 13-15.
大畑純二・皆木宏明 (2011) クロゲンセイの採集と生態等について. 島根県立三瓶自然館研究報告No.9,99-101.
大畑純二・皆木宏明 (2012) クロゲンセイの分布と生態に関する若干の知見. 島根県立三瓶自然館研究報告No.10,19-33.

県内での生息地域・生息環境

県中西部の山地にあるエサキムカシハナバチの営巣地で確認されている。

存続を脅かす原因

寄主となるエサキムカシハナバチの営巣地のある露頭の改変。

(執筆者: 皆木 宏明)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ハムシ科

クロガネネクイハムシ

Donacia flemola Goecke, 1944

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



選定理由

湿地に生息する甲虫で、県内における生息地は数カ所のみが知られている。

概要

体長6.5〜7.0mm。背面は黒色で青色を帯びた金属光沢がある。肢は長く、全体に黒色。前胸背板は疎らに点刻される。上翅間室は横シワがあるが、浅い。成虫は5〜6月に出現し、スゲ類に集まり、葉を摂食する。生息環境は半日陰の湿地である。国内では本州、国外ではロシア(プリモルスキー、アムール)、朝鮮半島、中国東北部に分布する。

参考文献

Hayahi, M. (2020) Revision of extant and fossil Donaciinae (Coleoptera: Chrysomelidae) of Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, Supplementary Series, (2): 61-159.

野津幸夫・中野一成(2017)クロガネネクイハムシを島根県奥出雲町で採集。すかしば, (64): 42

県内での生息地域・生息環境

県東部の湿地に生息している。生息地は複数知られているが、小規模な湿地も含まれている。

存続を脅かす原因

湿地の自然遷移。林道等の開発。本種の主要な生息地は、保全地域に含まれていない。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

コウチュウ目ハムシ科

ツヤネクイハムシ

Donacia nitidior (Nakane, 1963)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



選定理由

湿地に生息する甲虫で、県内における生息地は数カ所のみが知られている。

概要

体長5.0〜6.5mm。背面は銅色または青色で金属光沢がある。肢は短く、腿節の基部は赤褐色。前胸背板は粗く点刻される。上翅間室は密な横シワがあるが、浅い。陰茎先端部のくびれは浅く、先端に小さな突起がある。骨片の中央突起は太短く、下方に向かって曲がる。カツラネクイハムシに似ているが、本種の複眼が小さいことで区別できる。成虫は5〜6月に出現し、スゲ類に訪花する。生息環境は一般には日当たりの良い湿地である。日本固有種で本州と佐渡に分布する。

参考文献

林 成多(2006)飯南町赤名のツヤネクイハムシとババスケヒメゾウムシ。すかしば, (54): 65.

Hayahi, M. (2020) Revision of extant and fossil Donaciinae (Coleoptera: Chrysomelidae) of Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, Supplementary Series, (2): 61-159.

林 成多(2012)「月刊むし・昆虫図説シリーズ2 日本のネクイハムシ」94pp. むし社, 東京.

県内での生息地域・生息環境

県中部と西部の湿地に生息している。今後、中国山地の小規模な湿地において生息が確認される可能性はあるが、島根県側の地形は一般に急峻であり、広島県側と比べると湿地そのものが少ない。

存続を脅かす原因

湿地の自然遷移。林道等の開発。県東部の湿地は保全されており、生息環境としては安定した状態にある。

(執筆: 林 成多)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハエ目メバエ科

オオズグロメバエ

Archiconops niponensis (Vollenhoven, 1863)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):前田泰生



選定理由

国内では、採集個体数がきわめて少ない 寄生性種である。

概要

体長はメスが13–16mm、オスが13–17mm。メバエ類のなかでは大型の美麗種である。雌雄は外形が酷似し、頭部は赤褐色、胸・腹部は灰色を呈している。メバエ類はすべて寄生性で、寄主として有剣類のハナバチ上科を中心に、スズメバチ上科、アナバチ科、ベッコウバチ上科が知られている。発達した口吻をもち、顕著な訪花性をもつ。生態がわかっていないほかの種では、メバエ類は寄主のハチに抱きつきその腹部の背板間に産卵管を挿入して産卵するという。ふ化した幼虫は、最初は寄主の血リンパを体表から吸収するが、発育につれて寄主の腹部内臓を食べ尽くして、ここに蛹を形成する。寄主は砂丘地に多産するツチバチ類らしく、ハマグルマやハマゴウの花上での待ち伏せと、寄主成虫の追撃がしばしば観察されている。最近の大社砂丘における生態調査によると、活動期間は7月上旬から8月中旬で、寄主と推測されるツチバチ類

参考文献

前田泰生 (2006) 島根県産のメバエ類採集記録。すかしば, (54): 1-6.
前田泰生 (2012) 島根県産メバエ類の採集記録補遺。すかしば, (59): 1-2.

の活動期とよく符合した。越冬は、土中で死亡した寄主腹部内で蛹態で行うと考えられる。性比は、ややオスに傾斜している。国内では、本州・九州から分布が記録されている。国外では、熱帯アフリカ・東南アジア・中国にも広く分布する。

県内での生息地域・生息環境

松江市、出雲市の大社砂丘のほか、江の川(江津市)と高津川(益田市)の河川敷でも採集されている。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

特記事項

Archiconops erythrocephalus (Fabricius) とは別種であることが最近判明した。

(執筆者: 前田 泰生)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目ヤガ科

カバフキシタバ

Catocala mirifica Butler, 1877

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大生唯統



選定理由

県内での生息地がきわめて限定され、個体数も少ない。

概要

開張48–59mm。前翅はキシタバ類に多い樹皮模様で、灰青色を帯びる。中央から翅頂部にかけては、前縁に接して、広い暗色部がある。成虫は7月から8月にかけて見られ、灯火や樹液に飛来する。また、果樹にもやってくるという。幼虫の寄主植物はカマツカが知られる。本州および四国に分布するが、局地的で、国内に産するキシタバ類のなかで、姿を見るのがもっとも困難な種といわれている。国外では中国に分布。

参考文献

門脇久志・淀江賢一郎・大島 弘 (1992) 島根県で採集された蛾類目録。すかしば, (37/38): 1-44.
岸田泰則 (編) (2011) 日本産蛾類標準図鑑2。学研教育出版。東京。

県内での生息地域・生息環境

島根半島西部および県西部のやや海よりの地域での古い採集例があるだけで、記録も途絶えている。生息地域が海寄りの地域のみとも思われない。引き続きついでいな調査を続け、生息実態を把握する必要がある。

存続を脅かす原因

雑木林を含む良好な林の消失。

(執筆者: 三島 秀夫)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目セセリチョウ科

ギンイチモンジセセリ

Leptalina unicolor (Bremer et Grey, 1835)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

生息地が減り個体数も減少している。

概要

翅長15-16mm。翅の裏面にはみごとな銀線がある特異な模様で近似種はいない。北海道から九州まで広く分布するが、どこでも個体数の減少傾向が見られる。本種は食草のススキ・オギがある明るい草地在り被い尽くすと姿を消す。5月と7-8月の年2回発生し、草上を弱々しく飛び続け、葉に止まったり花で吸蜜したりする。また湿ったところでは吸水もし、時には集団にもなる。

参考文献

石本信博・佐々木保(1979) 浜田市で採集したギンイチモンジセセリとクロヒカゲモドキ。すかしば, (12): 30.
松田 賢・中村慎吾(1999) 高津川の昆虫相。ホシザキグリーン財団研究報告, (3): 57-119.
岡 義人(1979) 三隅町でギンイチモンジセセリを採集。すかしば, (12): 37.
山本正志(2005) 江津市の海岸でギンイチモンジセセリを採集。すかしば, (53): 25.

県内での生息地域・生息環境

県東部では斐伊川、西部では浜田市(旧三隅町)、高津川など数カ所が産地として知られている。開発などで産地が破壊され絶滅しているところもある。遷移の進行など残された産地も環境が悪くなっている。米子市では高速道路のり面で発生しているところがあり、県内でもそういう可能性はある。

存続を脅かす原因

手入れ不足による草地の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目セセリチョウ科

スジグロチャバネセセリ

Thymelicus leoninus (Butler, 1878)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

局所的で個体数も減少傾向である。

概要

翅長14mm前後。地色は赤橙色、翅脈が黒い線状になりその名がある。オスは斜状性標があるが、メスはヘリグロチャバネセセリに酷似し識別が困難。7-8月に発生、渓谷沿いの林縁の明るい草地在り被い尽くすと姿を消す。7-8月に発生、渓谷沿いの林縁の明るい草地在り被い尽くすと姿を消す。葉に止まるときは前翅を立て、後翅を開くセセリチョウ独特の姿勢をとる。

参考文献

坂田国嗣(1997) 仁多町にてスジグロチャバネセセリ多数確認。すかしば, (45): 58.
淀江賢一郎(2021) 飯南町志津見でスジグロチャバネセセリを採集。すかしば, (68): 34.

県内での生息地域・生息環境

県内では島根半島、船通山、立久恵峡、江の川流域などで確認されているが少ない。奥出雲町(旧仁多町)呑谷は、年によって多産することもあるが、2013年は伐採後の山道が放置されて荒れて減少していた。近似種ヘリグロチャバネセセリが産地の草付きに生息するのに対し、本種は谷沿いの林縁草に多く、すみ分けをしている。

存続を脅かす原因

生息地の開発改修、自然遷移。

(執筆: 淀江 賢一郎)

昆虫類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目セセリチョウ科

オオチャバネセセリ

Polytremis pellucida (Murray, 1875)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大江基博



選定理由

1990年代より県内全域で減少傾向が見られる。普通種とされていたが、全国的にも減少傾向にあるという。

概要

翅長22-23mm。翅裏面の白斑がジグザグに並び所で近似種と識別できる。飛翔は敏速で、ノアザミ、オカトラノオなどの花を訪れ、ときには吸水もする。年2回の発生で、ササ原や雑木林周辺の林縁草地がおもな生息地になるが、河川敷でも見られる。

県内での生息地域・生息環境

平地から山地まで、林縁のイネ科植物の生える草地やササ草原に広く生息するが、密度は低い。近年、多産していた東部でも著しく減少している。しかし、普通種とされていたために昔の記録が乏しく、定量的な比較が困難であり、今後のデータ集積が必要である。

存続を脅かす原因

開発や、遷移の進行、林縁の手入れ不足による荒廃など。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

参考文献

淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志 (2006) 島根県の蝶類—島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245. 日本生物教育会島根大会実行委員会.

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目セセリチョウ科

ミヤマチャバネセセリ

Pelopidas jansonis (Butler, 1878)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

産地・個体数とも著しい減少傾向が見られる。

概要

翅長16-21mm。本州(隠岐諸島を含む)、四国、九州に分布。チャバネセセリの仲間は、後翅裏面の白斑の並び方で種類を識別するが、後翅の中室に大きな白斑があるのは本種のみで識別は容易。年2回、5月ごろと7-8月に発生する。山地樹林周辺の草地を敏速に飛び回り、ノアザミ、ヒメジョオンなどの花に好んで吸蜜し、湿地で吸水もする。

県内での生息地域・生息環境

以前は島根半島の山麓にも多かったが、近年減少傾向にある。隠岐(島後)でも最近の記録が少ない。三瓶山では比較的まだ多く見られる。採草地、牧場などの広い草原では見られない。

存続を脅かす原因

雑木林周辺(林縁)の草地の荒廃。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

参考文献

淀江賢一郎 (1988) 島根県加賀でミヤマチャバネセセリを採集。すかしば, (29): 23.
淀江賢一郎 (1989) 松江市内のミヤマチャバネセセリ。すかしば, (30): 55.
淀江賢一郎 (1994) ミヤマチャバネセセリ解説と写真。「山陰のチョウたち」: 158.

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目アゲハチョウ科

ギフチョウ

Luehdorfia japonica Leech, 1889

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

県内広く分布しているが、開発や環境の変化で個体数や生息地自体も減少傾向にある。

概要

翅長29—32mm。日本特産種。年1回3～4月に発生する。成虫には顕著な陽光性があり、早朝から日中にかけて樹影のある山頂部や尾根筋、伐採斜面などに集まって活動する。この集合と分散によって地域全体の個体群が維持されるという側面がある。卵はカンアオイ類の新芽裏面に10個程度にかためて産みつけられる。ミヤコアオイは浅い谷筋や薄暗い林中に多いが、産卵は林縁部のものに集中する。春は明るく、夏は薄暗くなるような季節的推移のはっきりした林床が生息域となる。

県内での生息地域・生息環境

本種の生息にもっとも適した環境は、雑木の疎林と藪や小川が混交する起伏に富んだ地形に適度に開けた空間、入り組んだ山裾の里山である。

参考文献

広江寅三 (1936) 【島根県】 能義郡赤屋村産鱗翅類。ユーグレナ, 4(5): 43-47.
柳楽泰久 (1936) 分布三件。昆虫界, 4 (23) : 69.
淀江賢一郎 (1979) 松江市近郊のギフチョウ調査記録(1)(2)(3)(4)。すかしば, (11) : 27. (12) : 29-30. (14) : 19-20. (16) : 27-28.
渡辺一雄 (1998) ギフチョウの飛行行動と分布論—地形依存的集合・散開運動による散逸の防止と生殖。ホシザキグリーン財団研究報告, (2) : 165-223.
渡辺一雄・淀江賢一郎・難波通孝・山中捷二・後藤和夫 (2000) 中国地方におけるギフチョウ—分布図および分布論。ホシザキグリーン財団研究報告, (4) : 225-237.

そのほかにも食草カンアオイ類さえ生育していればブナ、カシ、スギ、マツ、タケなどさまざまな林縁環境で局所的にみられる。食草はミヤコアオイ (松江市・安来市 (旧伯太町)・出雲市、江の川沿いなど)、サンヨウアオイ (浜田市 (旧三隅町))、タイリンアオイ (津和野町 (旧津和野、旧柿木村))。それぞれの個体群が異なった分布成立要因をもつメタ個体群と考えられる。いずれの地域においても土地開発などにより産地が狭められつつある。生息地の全体像は把握できておらず、新産地の発見とその生息環境の実態を詳しく知ることが急務である。本種の記録がなくても、カンアオイ類の生育する土地の大規模な造成や伐採にあたっては、生息の可能性が高いので事前の現地調査が必要である。飯南町 (旧赤来町) 女亀山で県条例により、松江市星上山・大田市大江高山では市条例によって採集が禁止されている。

存続を脅かす原因

大規模な土地開発、雑木林の手入れ不足による荒廃。
(執筆者: 淀江 賢一郎)

昆虫類

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目アゲハチョウ科

オナガアゲハ

Papilio macilentus Janson, 1877

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

産地・個体数ともに減少している。

概要

翅長49—70mm。黒いアゲハの中では、翅の幅が狭く尾状突起が長い特徴があり識別しやすい。5月、8月の2回発生。低山地から山地の落葉樹の多い谷筋の開けた場所によく現われ、ゆるやかに飛翔し、アザミなどの花で吸蜜したり地上で吸水したりする。もともとアゲハの中では個体数の少ない種である。

参考文献

淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志 (2006) 島根県の蝶類—島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245. 日本生物教育会島根大会実行委員会.
有田 斉・多賀敏正 (2025) オナガアゲハ解説. 「日本列島弧の蝶2」: 158-164. 昆虫文獻六本脚.

県内での生息地域・生息環境

県東部の県境付近の低山地でもよく発生していたが、山が伐採され環境が一変し姿を消したところもある。本種の食草は一般にはコクサギとされるが、県内で確認されている食樹はシキミ、カラスザンショウ。松江市八重垣神社周辺は普通に見られていたが、ここ15年ほどは確認できていない。隠岐 (島後) では、1980年代から記録がない。

存続を脅かす原因

落葉広葉樹林の手入れ不足による荒廃と思われる。
(執筆者: 淀江 賢一郎)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シロチョウ科

スジボンヤマキチョウ

Gonepteryx aspasia nipponica Bollow, 1930

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

1990年代より、産地・個体数とも減少傾向である。

概要

翅長30—35mm。翅の先端が尖っているのが特徴。6月に発生した成虫はヒメジョオン、オカトラノオなどの花で吸蜜する。オスはよく吸水にくる。また、翅を閉じたまま葉裏に止まる性質もある。盛夏時には夏眠をし、10月ごろ再び現われてノハラアザミなどで吸蜜し、そのまま越冬する。翌年3月ごろ暖かい晴天の日に現われてコバノクロウメモドキ類の枝先に産卵するが、1本の木に3~40個の卵を見かけることもある。越冬後の成虫は翅が痛んでいる。

参考文献

松野 宏 (2007) スジボンヤマキチョウの地域変異と中国地方個体群の特色。すかしば, (55): 1-5.
 三島昭一 (1995) 出雲市でスジボンヤマキチョウを採集する。すかしば, (41/42): 13.
 岡 義人 (2018) スジボンヤマキチョウの秋季活動を確認。すかしば, (65): 28.
 淀江賢一郎 (1974) スジボンヤマキ [チョウ] の早い産卵。すかしば, (2): 2.
 淀江賢一郎 (1978) 三瓶山の蝶類 (1)。すかしば, (10): 37-47.

県内での生息地域・生息環境

匹見峡、松江市忌部、船通山、呑谷、三瓶山、三井野原などの林縁で見られる減少が著しく近年はまれ。また、盛夏には高地のヒヨドリバナに吸蜜に来ていることがある。

存続を脅かす原因

コバノクロウメモドキを含む落葉樹林帯の伐採、雑木林の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シジミチョウ科

オナガシジミ

Araragi enthea (Janson, 1877)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—



選定理由

生息地、個体数とも減少している。

概要

翅長18mm前後。渓谷沿いに見られるオニグルミが食樹で、他のゼフィルスより少し遅れ7月中旬ごろ出現。昼間は葉陰で静止しているが、夕方になると食樹の梢を飛翔する。産卵は樹幹のシワ部分にするのを確認しているが、多くは休眠芽近くの枝で見られる。

県内での生息地域・生息環境

オニグルミは湿った土地を好み、水分が少ないところでは成木しない。そのため渓流沿いに繁殖するが、三瓶山北の原での成木林は、地下に水分を多く含んでいる特殊な環境であろう。堰堤工事や林道改修などで伐採されたり、遷移が進行したりで、各地とも環境は決して良いとはいえず、現在では隠岐(島後)、奥出雲町などに散発的に見られるに過ぎない。また隠岐(島後)産は特異な個体群であり特別な保全が必要である。

存続を脅かす原因

渓谷沿いの道路拡幅による食樹オニグルミの混じる落葉広葉樹林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

参考文献

浅野 隆・小椋英男 (2000) 中国山地のオナガシジミの変異。蝶研フィールド, 7 (15): 15-19.
 高坂 寿 (1992) 西日本のオナガシジミ。蝶研フィールド, 7 (4): 6-12.
 森川比呂志 (1977) 隠岐合宿報告 [4月のチョウ]。Sakaiensis, 14(1): 4-7.
 大田高校生物部 (1965) 三瓶山の蝶類。三瓶研究総合誌第一集: 34-40.
 山本正志 (1972) [島根県仁多郡] 横田町におけるオナガシジミの一産地について。Longicorn, (3): 12.

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シジミチョウ科

ウスイロオナガシジミ

Antigius butleri (Fenton, 1882)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 筆谷憲一



選定理由

生息地、個体数ともに減少している。

概要

翅長16–18mm。鳥取県大山のような高標高地ではミズナラ林で6月下旬ごろから7月中旬ごろに発生するが、県内の低山地では6月中旬ごろナラガシワ林に発生する。ウラジロミドリシジミ、ヒロオビミドリシジミのようにナラガシワのある程度まとまった林ばかりではなく、低山地の農道脇にポツリと点在する木にも少ないながら見られる。日中は葉陰に静止していることが多く、目立ちにくい種ではある。もともと少なかった種に思えるが、車の排ガスや遷移による影響も考えられ、昔は確認できた所も今では見られないところが多い。

参考文献

三島昭一 (1978) 出雲市の蝶類。すかしば, (10): 17-21.
中村泰士 (1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて-。すかしば, (4) : 3-5.
岡 義人 (1969) 出雲市のゼフィルスII. NECYDALIS, 2 (4) : 1-3.
岡 義人 (1969) 出雲市産蝶類目録II. 自刊孔版, 8pp.

県内での生息地域・生息環境

東部では2002年に低山地の農道脇の樹から確認できた所もあるが、樹が大きくなり枝が道路へ張り出せば伐採される恐れや、遷移進行で生息環境は決してよくない。雲南市(旧木次町)、吉賀町(旧六日市町)には毎年確認されているところも残されている。

存続を脅かす原因

食樹ナラガシワを含む雑木林の荒廃と伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シジミチョウ科

ミドリシジミ

Neozephyrus japonicus (Murray, 1875)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 高野英明



選定理由

生息地が限定され個体数も減少傾向。

概要

翅長18–20mm。食樹ハンノキ、ヤマハンノキが自生する湿地に、6月下旬から7月中旬ごろ発生する。北海道から九州まで広く分布し、平地から山地まで見られるが、山陰では山地性となる。オスの翅表は金緑色、メスは黒褐色で、A、B、AB、Oと呼ばれる4型の色斑が現れる。発生地を離れることなく、昼間は葉上で静止していることが多いが、夕方には活発に活動する。

参考文献

近木英哉 (1974) 島根県自然環境保全地域候補地学術調査報告書第1集。赤名湿地性植物群落。: 22-23.
三島昭一 (1990) 【島根県】大田市周辺のミドリシジミ調査記録。すかしば, (34): 18.
中村泰士 (1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて-。すかしば, (4) : 3-5.
淀江賢一郎・中井博喜・山本正志 (1976) 赤名湿地で得た蝶類。すかしば, (6): 30.

県内での生息地域・生息環境

県東・西部の湿地帯に食樹が点在し、生息が確認されているが、規模は小さい。ハンノキ林があっても本種が見られない場所、小川沿いの1本の樹に発生していたがすでに姿を消した場所もある。

存続を脅かす原因

ハンノキの生える湿地は埋め立てや遷移で不安定であり、現在の状況からすると、今後長期間安定した発生地は望めないようにも思われる。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シジミチョウ科

ヒロオビミドリシジミ

Favonius latifasciatus (Shirouzu et Hayashi, 1959)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):山本正志



選定理由

ナラガシワに依存しているため産地が限定され、個体数も減少傾向である。

概要

翅長22-24mm。中国地方のみに生息する。低山地に見られるナラガシワに依存。国外では朝鮮半島、ロシア沿海州に分布しモンゴリナラに依存する。6月上旬から下旬ごろに発生するが、ある程度古木が存在する林に見られる。翅表が青緑色のミドリシジミ類の中では発生が早い。オスは晴天の日、朝10時ごろより活動を始め、昼ごろに一時活動が鈍くなり、2時ごろから再び活動する。追飛や卍飛翔など激しく飛翔するが、メスは不活発で葉上にいることが多く、早朝には下草にも降りている。

参考文献

松野 宏 (1972) 山口県産蝶類数種の記録、山口県の自然、3 (6) : 20-22.
三島寿雄 (1970) 島根県東部のヒロオビミドリシジミ、昆虫と自然、5 (12) : 7-8.
中村泰士 (1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて、すかしば、(4) : 3-5.
淀江賢一郎 (1986) 島根県東部のヒロオビミドリシジミ新産地、すかしば、(25) : 16.

県内での生息地域・生息環境

ナラガシワは県内の低山地に広範囲に点在するがごく小規模な林しかないため、本種の生息密度は低く生息地も限られている。益田市(旧匹見町)、吉賀町(旧六日市町)、邑南町(旧瑞穂町)、美郷町(旧邑智町)、飯南町(旧頓原町)、奥出雲町(旧横田町)、飯南町(旧赤来町)などに記録がある。

存続を脅かす原因

ナラガシワはまったくの雑木として扱われるため伐採されやすく、保全が必要である。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シジミチョウ科

ミヤマカラスシジミ

Fixsenia mera (Janson, 1877)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
情報不足 (DD)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

1990年代より、産地・個体数とも減少傾向である。

概要

翅長16-18mm。山地性のチョウで、年1回7月に現われ、二次林や落葉樹林周辺の明るい場所を敏速に飛び回り、ヒメジョオンなどの花を訪れる。産卵は食樹クロウメモドキ類の枝にし、卵で越冬する。

参考文献

有田 齊・前田善広 (2015) 珠玉の標本箱、日本産蝶類標本写真及びデータベース、(10)、NRC出版。
小林一彦 (1957) 毛無山を中心とした島根広島県境の蝶類採集報告、千鳥、(3) : 31-42。
中村泰士 (1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて、すかしば、(4) : 3-5。
山本正志 (1972) ミヤマカラスシジミ[島根県仁多郡]横田町に産する、Longicorn、(3) : 13。
淀江賢一郎 (1978) 三瓶山の蝶類 (1)、すかしば、(10) : 37-47。

県内での生息地域・生息環境

食樹は落葉樹林帯の中に見られ、三瓶山、益田市(旧匹見町)、奥出雲町(旧横田町)小川川、津和野町青野山などで記録がある。奥出雲町(旧横田町)三井野原も良好な生息地であったが、1980年代には林が伐採され、さらにループ橋ができてからは生息環境が大きくかわり絶滅したと思われる。食樹が同じであるスジボソヤマキチョウともども減少が著しいのは、減少要因が同じだろうと推測される。

存続を脅かす原因

クロウメモドキを含む落葉樹林帯の伐採、荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目シジミチョウ科

カラスシジミ

Fixsenia w-album fentoni (Butler, 1882)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 筆谷憲一

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

—



選定理由

分布が限定され、個体数も激減してまれな種になってきた。

概要

翅長15–19mm。後翅裏面の白色条がW型になり、同属のミヤマカラスシジミと識別できる。北海道、本州、九州に分布する。食樹のハルニレがある落葉広葉樹林に見られる。年1回6月に発生、オスは夕方占有行動をし、三瓶山などではウツギなどで吸蜜するのを見ることができる。

参考文献

青木英勝 (1963) 高津川周辺の蝶類分布。高津川総合学術調査研究報告。115-117。
和泉浩行 (1988) [島根県飯石郡] 赤来町の蝶類。すかしば、(29): 1-5。
門脇久志・淀江賢一郎 (1986) 隠岐の昆虫。日本の生物、2(4): 43-52。
山本正志 (1974) カラスシジミを採集。すかしば、(1): 5。(しまね虫屋連盟)
淀江賢一郎 (1983) [島根県] 三瓶山でカラスシジミを採集。すかしば、(19): 4。

県内での生息地域・生息環境

県内では西部、東部、隠岐諸島で記録があるが、開発などの伐採で絶滅していると思われるところもある。隠岐諸島は地理的変異をもつ独特の個体群が確認されているが、薬剤空中散布の影響を受け激減した。多産した三瓶山でも牧場拡張などでハルニレの大木が伐採され大きな影響を受け、個体数は減少した。近年、奥出雲町、雲南市でも発見されている。

存続を脅かす原因

ハルニレを含む落葉広葉樹林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

昆虫類

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目タテハチョウ科

クモガタヒョウモン

Nephargynnis anadyomene ella (Bremer, 1864)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者): 佐藤るり子

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

分布は広いが極端に減少傾向にある。

概要

翅長30–41mm。他のヒョウモン類に先駆けて、平地では5月中旬ごろより出現する。低山地から山地まで広範囲に生息しているが、広い草原ではなくは雑木林周辺、谷筋にある明るい草地などで吸蜜しているのを見かけることが多い。比較的ゆるやかに飛ぶが、人には敏感で近づくとすぐ飛び立つ。やがて夏眠に入り姿を消し、秋再び現われて活動し産卵する。

参考文献

山本正志 (2006) 島根県中部地域(江の川流域)におけるクモガタヒョウモンの採集・観察記録。すかしば、(54): 48-49。
淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志 (2006) 島根県の蝶類。島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245。日本生物教育会島根大会実行委員会。

県内での生息地域・生息環境

里山域を中心にして、県内全域(隠岐諸島・島根半島含む)に低密度で分布していたが、近年は目撃することさえ困難になってきた。以前の三瓶山では遊歩道沿いなどのウツギに集まるが多かった。不用意に雑木林を伐採せず、その林縁部を欠かさず手入れしていくなど、里山環境を保全していくことが望ましい。

存続を脅かす原因

雑木林周辺(林縁)の手入れ不足による荒廃。農業の影響も考えられる。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目タテハチョウ科

ミスジチョウ

Neptis philyra excellens Butler, 1878

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



選定理由

近年個体数が減少している。

概要

翅長31-37mm。古くは松江市内や郊外の社寺林にも見られたが、急速に姿を消し、現在では深谷沿いにカエデがある落葉広葉樹林にまれに見られる程度である。しかし、発生にはカエデ林は必要なく、1本の大きな木があり、周囲の環境さえよければ発生源になる。年1回6月上旬に発生、樹冠を滑空するように飛翔、よく吸水のため地上に降りてくる。幼虫越冬するが、カエデの葉が落ちないように柄を枝と糸で綴っているため冬季には目に付きやすい。

参考文献

小林一彦 (1958) ミスジチョウと市街地。千鳥, (4): 1-3.
三島昭一 (1997) 江川水系でミスジチョウを観察する。すかしば, (45): 12.
山本正志 (1978) 仁多郡内のミスジチョウの記録。昆虫と自然, 13 (13): 18.
淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志 (2006) 島根県の蝶類-島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245.日本生物教育会島根大会実行委員会。

県内での生息地域・生息環境

三瓶山、呑谷、匹見峡、大万木山などで確認されているが、どこも必ず見られる場所ではなく、カエデのある深谷でも2~3年で幼虫さえも見られなくなることがある。

存続を脅かす原因

カエデの混じる自然度の高い落葉広葉樹林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目タテハチョウ科

オオムラサキ

Sasakia charonda (Hewitson, 1863)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



選定理由

近年著しく減少している。

概要

翅を開くと100mmを超すタテハチョウ最大の大きさで、飛翔も樹の周りを滑空旋回し力強く勇壮。オスの翅表には綺麗な紫色がありたいへん美しく、国蝶にも選ばれている。年1回6月下旬から7月に発生、オス、メス共にクヌギなどの樹液に集まる。幼虫はエノキ、エゾエノキを食し、落葉裏で越冬する。農山村の生活習慣の変化から里山が変貌し雑木林は著しく荒廃が進んだ。里山を代表するチョウ類が衰亡していく様相が本種の動向から垣間見える。

参考文献

中原正登 (1982) 旅伏山でのオオムラサキ採集例。すかしば, (16): 4.
中村泰士 (1977) 島根県下のオオムラサキ杉谷型。すかしば, (7): 39.
山本正志 (2006) 島根県中部地域(江の川流域)におけるオオムラサキの採集・観察記録。すかしば, (54): 45-46.
吉田浩二 (1972) 横田のオオムラサキ。Longicorn, (2): 4-5.

県内での生息地域・生息環境

県内広く低密度で確認されているが、浜田市では開発、安来市のような自然林も樹液の出る樹が枯れるなど環境悪化が進んでいる。車の排ガスも影響が大きいと思われる。多産していた三瓶山でも少なくなってきた。

存続を脅かす原因

幼虫の食樹エノキ・エゾエノキ、成虫の蜜源クヌギ・アベマキを含む自然度の高い雑木林の伐採、手入れ不足、放置による荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

チョウ目ジャノメチョウ科

ヒメヒカゲ中部・近畿・中国地方亜種

Coenonympha oedippus arothius Okada et Torii, 1945

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一



選定理由

生息地が局限され、個体数も減少傾向である。

概要

翅長20—23mm。年1回6～7月に出現、翅裏面の眼状紋に特徴があり、地理的変異、個体変異が知られる。中部地方と中国地方の山陰側では高標高地の乾性草原に、東海地方と山陽地方では低標高地の湿性草原に見られるという特異な分布を示す。生息地では日あたりのよい草地をゆるやかに飛翔し、オカトラノオなどの花を訪れる。

参考文献

広江寅三 (1931) 三瓶山採集行。ユーグレナ, 2 (3): 17-19.
 小路嘉明 (1993) ヒメヒカゲ産地一覧。蝶研サロン, (74): 16-19.
 山本直樹 (1995) 中国地方のヒメヒカゲ(上)。蝶研フィールド, 10 (7): 15-20.
 淀江賢一郎 (1994) 三瓶山の蝶類。「三瓶山の昆虫相とその保全」: 77-95.

県内での生息地域・生息環境

雲月山と三瓶山の2カ所の乾性草原に生息する。雲月山では山頂近くの草地に多く見られたが激減した。三瓶山でも減少が激しく、西の原、北の原ではおそらく絶滅しており、東の原で見られるに過ぎず、憂慮される事態になっている。県内での幼虫の食草は知られていないが、他県の例からイネ科であることは間違いない。

存続を脅かす原因

手入れ不足や過放牧による乾性草原の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハチ目アナバチ科

ニッポンハナダカバチ

Bembix nipponica F. Smith, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):中村唯史



選定理由

典型的な海浜性のカリバチで、海浜の開発や破壊による海浜固有の生態系の喪失で、生息密度が激減している。日本固有種。

概要

体長は雌雄間で差がなく、18mm前後の大型のカリバチである。体色は全体的に淡黄色で、胸部は黒色、腹部の各背板後縁には黒色の横縞がある。名前は、顔面の縦中央部が突起していることに由来する。海浜では風による砂の移動の少ない場所、すなわち松が疎らに生育する防風林内や民家の庭先などの日当たりのよい場所を好んで集団営巣する。育房は、緩やかに傾斜して穿孔された主坑(深さ約15—20mm)から分岐した側坑に水平方向に連結される。営巣地では、オスがメスを求めて翅音高く迅速にパトロールを行う。幼虫餌として、ハナアブ科をはじめとするさまざまな分類群のハエ類の成虫を狩る。卵は、育房内で最初に貯蔵した獲物の腹面に産下される。ふ化した幼虫は、親バチの随時給食

参考文献

林 成多・片岡大輔・大谷隆起 (2023) 島根県雲南市木次町ふるさと尺の内公園隣接の裸地試験区における昆虫類調査 (2012年)。ホシザキグリーン財団研究報告, (26): 65-82.
 尾原和夫 (2023) ニッポンハナダカバチの新産地。すかしば, (70): 67.
 常木勝次 (1948) はなだか蜂研究記。札幌講談社, 303 pp. 札幌.
 Tunekii, K. (1956, 1957, 1958) Ethological studies on *Bembix nipponica* Smith, with emphasis on the physiological analysis of behavior inside the nest (Hymenoptera, Sphecidae). Parts I, II, III. The Memoris of the Faculty of Liberal Arts, Fukui University., Series II. Natural Science, (6): 77-172. 4 pls.: (7): 1-115; (8): 1-78. 4 pls.

で发育する。閉鎖された育房口は、給餌のつど閉閉が繰り返される。年1化性で、活動期間は6月末から8月中旬までの1.5カ月間である。越冬は蛹中で前蛹態で行う。国内での分布域は広く、北海道から屋久島まで及び。同胞種の台湾ハナダカバチ *Bembix formosana* Bishoff が台湾と八重山諸島に分布する。

県内での生息地域・生息環境

大社砂丘(出雲市)、生息環境は、大田市内の神社、三里ヶ浜(益田市)。いずれも海浜がその近辺の砂地。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

特記事項

海浜と類似した環境であれば、内陸でも営巣が見られる(京都銀閣寺の境内がその例)。

(執筆: 前田 泰生)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ハチ目ハキリバチ科

キバラハキリバチ

Megachile xanthothrix Yasumatsu et Hirashima, 1964

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者): 皆木宏明



選定理由

典型的な海浜性のハナバチで、海浜の開発や破壊による海浜固有の生態系の喪失で、生息密度がきわめて低い。

概要

体長はメスが16-17mm、オスが15-16mm。大型のハキリバチである。胸・腹部の背面が橙黄色ないし黄褐色の毛で覆われている。希種のため、生態的知見がきわめて乏しい。年1化性で、活動期間は夏から初秋である。最近の大社砂丘での調査によると、初見日はオスが7月上旬、メスが7月下旬であった。広食性であるが、花粉を採集できる花資源は大型のマメ科植物に限定される。海浜では、ハマナタマメが主花資源植物と目される。山陰の海浜ではこの植物の生育はまれで、これが原因で生息密度が極端に低いのかも知れない。営巣は砂地に穿孔して行われるほか、アナバチの1種の放棄巣や野ネズミの旧坑なども利用する。アナバチの1種の細い旧坑を利用した巣では、巣の構造は筒類営巣性のハキリバチ類のそれと類似している。すなわち、複数の育房が直列に連

続的に配置される。また、ほかのハキリバチ類と同様に、育房のキャップは卵形葉片で、育房栓と入口栓はいずれも円形葉片で閉鎖される。越冬態は前蛹である。国内では、西南日本と関東地方においていずれも少数個体が採集されている。最近、温暖化の影響で東北地方の仙台でも生息が報告されている。国外では、中国北東部と韓国で分布が記録されている。

県内での生息地域・生息環境

大社砂丘(出雲市)のほか島根県内の数カ所の砂丘、内陸部でも砂丘地のような砂地がある木次町ふるさと尺の内公園で採集されている。

存続を脅かす原因

海浜固有の生態系の破壊。

特記事項

内陸でも河川敷で営巣が見られる。ここでは、クズが花資源植物として利用される。

(執筆: 前田 泰生)

参考文献

郷近勝夫・前田泰生(2020) キバラハキリバチの宮城県と島根県からの採集記録。ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 281-282.
岩田久二雄(1941) 日本内地産葉切蜂六種の習性考察, 高津中学校編「紀元2600年記念高津中学校記念論文集」: 223-248.
林 成多・片岡大輔・大谷隆起(2023) 島根県雲南市木次町ふるさと尺の内公園隣接の裸地試験区における昆虫類調査(2012年)。ホシザキグリーン財団研究報告, (26): 65-82.
前田泰生・北村憲二・松本圭司・宮永龍一(2004) 海浜における送粉生態系の保全に関する研究。ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 275-303.
宮永龍一・清水加那子・井上くるみ(2022) 海浜性植物ハマゴウの訪花ハナバチ相と周辺環境との関係について。中国昆虫, (35): 1-9.

準絶滅危惧 (NT)

トンボ目カワトンボ科

アオハダトンボ

Calopteryx japonica Selys, 1869

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者): 北山拓



選定理由

水生植物が豊かで砂地の河川中流域を中心に生息しており、河川改修等による環境変化や水質悪化に弱い。

概要

全長55-63mm。ハグロトンボによく似るが、成熟したオスでは翅が青藍色に輝き、また腹部第9、10節の腹面が白色である。オスは縁紋を持たないが、メスは翅に白色の偽縁紋を持つ。羽化時期はハグロトンボより約1カ月早く5月中旬ごろから始まる。最盛期は6月で8月上旬まで見られる。本種はメスへの求愛行動が特異で、オスは飛びながら腹面末端の白色部を誇示し、ときに流水面に浮かんで流されるような行動をとる。産卵はメス単独で水中植物に行うが、しばしば潜水産卵に移行する。朝鮮半島から中国東北部、東シベリアに分布し、国内では本州および九州の各地に分布する。

県内での生息地域・生息環境

流域の比較的大きな河川の中流域を中心に広く分布するが、生息河川はかなり限定される。隠岐諸島では未記録。

存続を脅かす原因

生息地流域の開発等による水質悪化や、河川改修等による河川植生環境の消失。

(執筆: 北山 拓)

参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治(2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫(2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.